

基本情報 ■作者：林子平(1738~93) ■年代：寛政3年(1791)

■寸法：縦24cm 横16cm 厚さ1.2cm



日本の海防のもつ問題点を指摘した書物・海国兵談

著者・林子平について

林子平は、江戸時代の経世家で、父は学問に精通した幕臣岡村良道であったが、罪を得て除籍されたため伯父の林従吾に育てられた。姉が6代藩主伊達宗村の側室になった関係で、兄が仙台藩士に召し抱えられ、仙台に移住した。

海国兵談とは

林子平の代表的な著書で天明6年(1786)に脱稿し、寛政3年(1791)に刊行された。

作者の林は長崎の^{*1}洋学者を通じて海外事情の研究を行い、日本が四方を海で囲まれた「海国」であることに注目し、本書では海辺の守りについて著している。

その中で、ロシアの南下政策に注意をうながし、外国に対するための軍備を早く整えることを主張して、海上での戦いや大砲による戦いの重要性を説いている。特に、海国の防備策として水戦に注目し、洋式軍艦の建造、海軍の振興、大砲の沿岸装備などを説き、江戸湾防備の必要性を強調した。

また、政治の中枢である江戸が海上を経由して直接攻撃を受ける可能性を指摘し、江戸湾の入り口に信頼のおける有力諸侯

を配置すべきであると論じている。この江戸湾防備の緊急性を説いたのは林が最初であり、対外問題の切迫をいち早くおおよけにした。

版木の没収と再刻

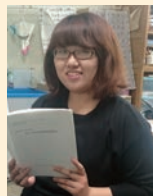
海国兵談は、当初1000部を目標に出版をはじめたが、自家蔵板であり巻数が多いことから、資金不足となった。そのため、寛政3年(1791)、わずか38部を刊行したところで、出版取締令に違反するとして幕府に召喚され、翌年に版木が没収された。この時林は自写による副本を秘かに所持していたため、後世に伝わることとなった。

以後、19世紀には実際に江戸湾の海防強化政策が幕府によって採用されるなど、幕末海防論の起点となった。林の海防論に現われた強い対外的危機感、富国強兵論などは近代日本に強い影響を与えた。

学芸研究員 森 千可子
実習生 曾我部絵梨

学芸研究員の目

この書物は、林子平が、当時のロシアの千島、北海道への南進に危機感を抱き、警告するために書かれたものです。荻生徂徠の兵書『録(けんろく)』の影響もあり、第14~16巻では武士土着論・富国策にも触れていますが、全般として国内戦の勝利よりも、対外戦の備えを論じました。



学芸研究員
森 千可子

この資料のココがすごい!!

林子平は、江戸湾に異国船が侵入する可能性があることを指摘し、江戸湾の防備が急務であると主張しています。江戸湾防備は、のちに、差し迫った問題となりますが、これを予見したのは、この本が最初です。

お気に入りポイント

海国兵談は、一旦は出版停止になったものの、後の時代に海防論の起点となりました。そして、近代日本にまで強い影響を与えたことがお気に入りです!

用語解説 詳しくはP26へ

*1 洋学